

熟達度測定テスト TOEFL Junior[®]を 継続的に受験する意義について

～定期考査・模試・英検[®]と比較しながら考えてみませんか～

明星大学 教育学部教育学科 准教授

佐古 孝義

〈2022年度まで、京都教育大学附属高等学校 進路指導主任/英語科主任〉

1. はじめに P1
2. 定期考査・模試とは何か? P1
～一定の範囲の学習内容の理解度・到達度を確認するもの～
3. 英検[®]の特徴 P3
～TOEFL Junior[®]のスコアと英検の取得級との対応を示した図からわかること～
4. TOEFL Junior[®]を受ける意義 P5
～英語の熟達度そのものを測定～
5. 今後の方向性を考えてみる P7
～大学入試がTOEFL Junior[®]のような〈熟達度〉型の試験に移行～
6. おわりに P7

著者紹介

佐古 孝義

明星大学 教育学部教育学科 准教授

〈2022年度まで、京都教育大学附属高等学校 進路指導主任/英語科主任〉

1980年岡山県生まれ。京都大学大学院 人間・環境学研究科修士課程修了。

現在、同大学院人間・環境学研究科博士後期課程在籍。

主な著書に『コーパス・クラウン総合英語』(編集委員会代表, 三省堂)。

TOEFL iBT[®]: 112 (R30・L30・S24・W28)、英検1級。



Danke Sehr

1. はじめに

いきなりですが、皆さんに質問です。
「あなたはどのくらい英語ができますか？」

こんな漠然とした質問をされて、皆さんの多くは困惑したことだろうと思います。何をもって「英語力」というのかという定義（内実）に踏み込めばいくらでも議論は複雑になるでしょうが、ここは差し当たり、何らかの「指標」で自分の英語力を示すという場面を考えてみてください。

私は、私立や国立の中学・高校で20年近く勤務し、国際教育や進路指導の担当を務めてきました。そうした経験を振り返ってみると、いわゆる「英語力」という問題に関わって、模試^{※1}を受ける意味や、模試と定期考査の違い、英検[®]などの資格試験を受験するべきか

否か、などについて生徒からよく質問や相談をされてきたことを思い出します。本稿では、こうした問いを導きの糸として、TOEFL Junior[®]を受験する意義についても考えてみたいと思います。

もう少しざっくりとした言い方をすればこうなります。

「模試を受けていたら、TOEFL Junior[®]受けなくてもいいですよね？」

「英検[®]受けるからTOEFL Junior[®]受けなくてもいいですよね？」

こう生徒に聞かれたときに、私ならどう答えるだろうか？それを考えてみたいということです。

※1 ここでいう模試（模擬試験）とは、「各予備校や塾、企業などが実施する、大学入学試験を想定した試験」のことを指すものとします。

2. 定期考査・模試とは何か？

「定期考査では点数が取れるのに、模試ではちょっと・・・」

こんな生徒の声をよく耳にしてきました。定期考査では、範囲外のこと（いわゆる教えない／習っていないこと）を出すわけにはいかないし、問題は授業でいつも使っている教科書や問題集をベースに作られるものがほとんど（もちろん、それぞれの学校によって事情は異なりますので、例外はあると思いますが）。要するに「範囲が決まっている」がゆえに、がっちりきっちり勉強すれば、場合によってはそれこそ満点だって狙えてしまう。これが定期考査の基本的なフォーマットでしょう。これは一

体どうしてなのでしょう？出題する先生側の立場からお話しさせてもらえば、定期考査には〈到達度〉の確認という目的があるからです。

一方で、模試を考えてみましょう。よく「模試ではその生徒の『実力』が出る」などと言われたりしますが、その理由の一つには、模試では定期考査よりも広い範囲（場合によっては「高校で習う全範囲」ということもありますよね）が問われるということが挙げられるでしょう。定期考査と違って「ヤマを張りにくい」わけですね。長文問題は言うに及ばず、どの英文も初見のものばかりです。出題形式についても、「○大オープン模試」のようにターゲットの入試

問題を踏襲するものであったり、大学入学共通テストに似せた試験形式や、あるいは広く一般的に入試に対応できる能力を測定するために様々なバラエティに富んだ問題を出題するものなどがあります。このように、内容面でも形式面でも定期考査以上に対策を取るのが難しいため、模試は正に皆さんの「英語の実力」を試すものと考えられるわけです。

ここで数多くの模試の中でも最もポピュラーなものの一つである進研模試を例にとりましょう。公式ウェブサイト※2によれば「進研模試／ベネッセ総合学力テストとはどんなテストですか?」という問いへの答えとして、次のように解

※2 「進研模試／ベネッセ総合学力テストに関するよくある質問」

Q. 進研模試／ベネッセ総合学力テストとはどんなテストですか？

<https://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/nyushi/qa/answer01.html>

ここにも明記されているように、模試を受験する意義というのは、「受験に必要な力」の定着度を確認するところにあります。それは、(1)を示す「偏差値」であったり、(2)に関わる「合格可能性」(いわゆる「判定」というものです)といった指標で数値化され、可視化されます。皆さんにとっては、自分の英語力の指標としてとても分かりやすいものとも言えるかもしれません。(慌てて補足しておきますが、ゆめゆめ模試での「偏差値」や「判定」にのみ一喜一憂してはいけません。よくHR担任や進路指導の先生から耳にタコができるほど聞いています。成績表に載っている設問別正答率などを頼りに、どの問題をなぜ間違えたのかという誤答分析を丁寧に行い、苦手分野の発見と克服に努めるべきであるということ、すでによくご理解いただいているとこ

※3 「進研模試／ベネッセ総合学力テストに関するよくある質問」

Q. 模試前の勉強法を教えてください

<https://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/nyushi/qa/answer04.html>

説が施されています。

大学・短大進学を目指す、全国約45万人が受験する全国最大規模の模擬試験です。これは大学入学共通テストの現役受験者人数とほぼ同数です。(1)ライバルともいえる多くの受験生の中で、自分の学力が確認できるのが特長です。全国平均正解率が10%程度の応用問題から、80%程度の基礎基本問題まで幅広く出題しているため、難関国公立大から私立大まで、(2)志望校合格に必要な学力の定着状況が確認できます。(下線、強調は引用者)

ろでしょう。)

さて、確かに模試は自分の英語の実力を示す非常に分かりやすい指標だということは認めましょう。とはいえ、それはあくまで「大学入試(合格)」という特定の目的に照らした場合の実力であり、「実際に英語が使えるかどうか」を示したものではありませんよね。(現に、例えば進研模試の出題と勉強法に関して、公式ウェブサイトでも「高校の授業で扱う内容をもとに作られて」いるので、「授業で習った内容を確実に理解しておくこと」が最も効果的だと明記されています※3)。ところが(当然ですが)「実生活で使う英語」は必ずしも学校の授業で扱われる内容に限られませんから、「模試の成績＝実践で使える英語力」とはならないことは容易にお分かりいただけたと思います。

ここで皆さんの英語学習の目的が、大学入試に合格すること「のみ」であるならば、模試を受験するだけで十分であると言えるでしょう。しかし、極めて特殊な例外を除けば、大学入学後、あるいは卒業して実社会に出てから全く英語と無縁で生きて行く人生を考えることは非常に難しいでしょうし(そんなふうに分身の人生の可能性を狭めてしまうのは得策ではないと思います)、そもそも大学入試を受け

ない生徒にとっては、模試はその性質上受験する意義を見出しがたいはずで、**英語力の伸長を測るのに模試「だけ」でよいということにはならない**ことは明らかです。

「じゃあ、自分の英語力を測りたいと思ったらどうしたらいいの?」この問いに対する答えとして多くの皆さんが思い浮かべる答えの一つは、英検®などの資格試験でないかと思えます。

3. 英検®の特徴

ここで、皆さんにとって最も馴染み深い英語資格試験の一つである英検®について見てみましょう。英検®は、その正式名称「実用英語技能検定」が示す通り、日常英会話からビジネスまで幅広い場面や話題を扱った出題によって、実用に即して4技能(リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング)を測る試験です。英検®の特徴として、学習進度やレベルに応じて7つの級が設定されていること、(CSEスコアも出ますが)やはり「合格か不合格か」の差が決定的な意味を持つことが挙げられます。つまり、例えば2級に合格すれば2級のお墨付き、ということです。でも、裏返して意地悪く言えば、合否ラインのギリギリでも構わない。でもそれって本当に2級が求める英語力*4を十分に身につけたと“自信を持って”言えるのでしょうか? 実際、TOEFL Junior®のスコアと英検®の取得級との対応を

示した図*5をみると、同じ2級、あるいは準1級保持者でも、その実力の幅はかなり広いことがわかります。

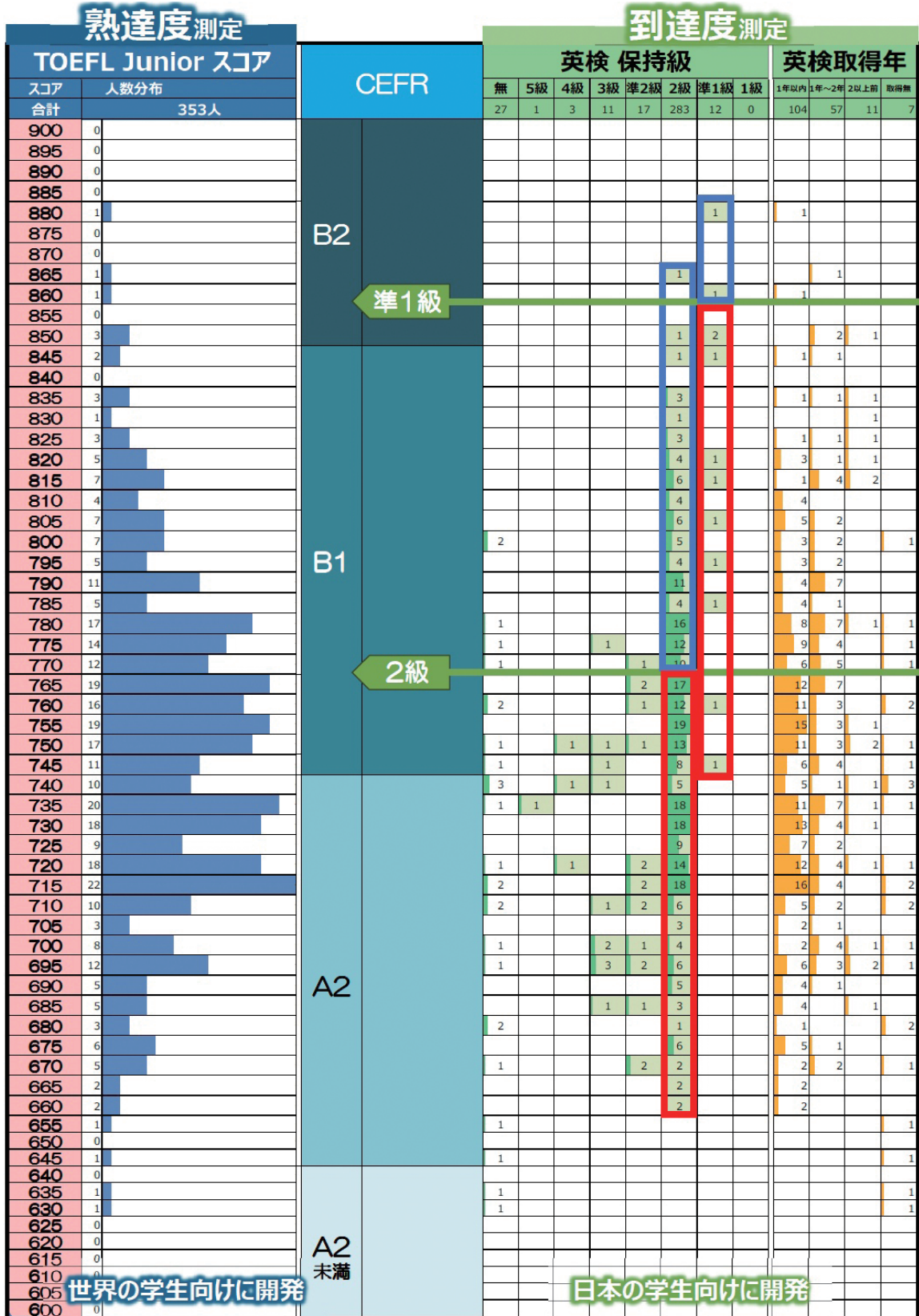
また英検®は日本で最も有名な英語資格試験だけあって、英検®に特化した塾やオンライン講座、豊富な過去問や予想問題集など、対策はかなりシステマティックになっており、対策の有無が合否を大きく左右するという側面があることは否定しがたい事実だといえます。上位級であれば、大学入試や就職・転職などで有利に働くこともあり、「目指す級に合格すること」が英語学習の(短期的)目標になることもあるでしょう。もちろんそれ自体は全く否定されるものではありませんが、英語学習の目的が「英検®〇級合格!」だけに留まってしまえば、**合格したらほっと一安心して勉強を止めてしまうことになるかもしれず、それはちょっと寂しいような気がします。**

※4 英検®の公式ウェブサイトでは、2級に関して

- ・読む:まとまりのある説明文を理解したり、実用的な文章から必要な情報を得ることができる。
 - ・聞く:日常生活での情報・説明を聞きとったり、まとまりのある内容を理解することができる。
 - ・話す:日常生活での出来事について説明したり、用件を伝えたりすることができる。
 - ・書く:日常生活での話題についてある程度まとまりのある文章を書くことができる。
- というCan-doリストが示されています。

<https://www.eiken.or.jp/eiken/about/cando/list.html>

※5 ある公立高校におけるTOEFL Junior®のスコアと英検®の取得級との対応図 (ダンケゼア提供資料)



4. TOEFL Junior®を受ける意義

次に、TOEFL Junior®を見てみます。この試験は「どれだけ英語が使えるか」を測るために、**定期考査や模試のように一定の範囲の学習内容の理解度・到達度を確認するものではなく、専門知識や背景知識を問わず英語の〈熟達度：どれだけ英語が使えるのか〉そのものを測定するものとして設計されています。**題材は世界の中学生、高校生の学生生活をベースにしたオーセンティックなもので、スコアはCEFRに（およびリーディングスコアは英語読書力を示すLexile®指数とも）連動した世界基準であることも特徴です。**端的に言えば、定期考査や模試と比べて「実際に『今』どれくらい英語が使えるのか」のリアルを測っている試験であると言えるでしょう。**

もう少し具体的に検討してみましょう。TOEFL Junior®の文法・語彙セクションでは、一つのパラグラフの文章の中に穴埋め問題が含まれているという出題形式に特徴があります。多くの模試では、かつてのセンター試験大問2に代表されるような短文形式での文法・語法問題が従来から出題されていますし、英検®でも大問1の語彙で同様の出題形式がとられていますが、**それらとは異なり、TOEFL Junior®ではひとまとまりの意味（文脈）を意識しながら、その文脈にあった選択肢を選ばせるものになっています。**

これが意味するところは明らかでしょう。より**実践に即した〈熟達度〉を測りたい**というポリシーが体現されているわけです。

さて、このTOEFL Junior®で測られる英語力と、皆さんが気になる大学入試との関係はどうか。例えば京都大学合格者の共通テストの得点、及び二次試験での得点との相関からも明らかなおと、TOEFL Junior®

のスコアには一定の信用を認めることができるでしょう*6。

TOEFL Junior®は、スコアとCEFRのランクで示され、英検®とは異なり、級別に可否を判定するものではありません。ですから、試験に合格するという目標達成のための”瞬間最大風速”を目指すものではなく、**あくまで「今の素の英語力ってどれくらいだろう」と診断的に受けるものだ**ということがわかるでしょう。これは、人間ドックに例えると分かりやすいかもしれません。人間ドック前だけ食事の節制をして数値を良くしようとするに何ら意味はないですね。

瞬間最大風速を目指すものではないということは、逆にいえば**継続的に自分の英語力の変化を見てゆくことができる**ということでもあります。興味深い事例として、英検®2級や準1級保持者のTOEFL Junior®スコアの推移を見てみると、取得後の勉強を怠っていたと思しき生徒のスコアやCEFRのランクが下降しているのが見て取れます*6。ここから読み取るべき教訓は「英語（第二言語）は使い続けなければ劣ってゆく」（京都大学金丸准教授の言葉）という乾いた真実ですね。**自分の英語学習を継続的に点検し、修正を図るためにも、時期をおいて何度か受験してみるということがいかに大事であるかがわかるか**と思います。

つまり、入試合格のため、資格試験突破のため、という目標を超えて、一生涯英語と何らかの形で付き合い、勉強を続けていこうとするのであれば、**ある瞬間の〈到達度〉を測る試験だけではなく、継続的変化を〈熟達度〉の観点から測定する試験も上手に活用して欲しい**ということです。皆さんが将来どんな目的で、どれくらい英語を使うことになるの

かは人それぞれ違って当然良いと思いますが、外国語を学ぶ意義を、先に述べたような実利的な文脈「だけ」に限定してしまっはもったいない気がします。

ところで、「複言語主義(plurilingualism)」という言葉をご存知でしょうか。「複言語」とは様々な言語を様々なレベルで(=別にペラペラと話せる必要はない)目的に応じて使い、かつ言語の背景にある文化を理解したうえで、交流し共存している状態のことを指します。言語学習の意義は、この複言語能力を伸ばすことだとCEFRでは言われています*7。私は、

皆さんが教室(学校教育)で外国語(多くは英語だと思いますが、理想的にはそれ以外の言語も含めて)を学ぶことには、「言語や文化に対する寛容性(tolerance)や多様性を受容する姿勢(positive acceptance)を身につける」という意義があると思っています。それがわかってもらえたら、きっと一生をかけて英語の勉強を続けてもらえるのではないかなと、ちょっと楽観的に考えています。とは言っても、入試も資格も大事なことに変わりはないんですけど…。

※6 TOEFL Junior® Totalスコア検証 水準別各層のスコア推移(ダンケゼア提供資料)



※7 Council of Europe (2007). From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe. Council of Europe. <https://rm.coe.int/CoERMPublicCommonSearchServices/DisplayDCTMContent?documentId=09000016802fc1c4>

5. 今後の方向性を考えてみる

実は今、**大学入試がTOEFL Junior®のよ
うな〈熟達度〉型の試験に移行してきていると
いうことは、すでに以前に別のレポート^{※8}で論
じたことがあります。**それと同じく、中学や高
校における英語の授業も、スピーキングも含
めた4技能をバランスよく伸ばすコミュニカテ
ィブな方向へ変わりつつあるのではないかと私
は見ています。つい先日も、令和5年度の「全
国学力・学習状況調査」が発表され、中学生
のスピーキング能力を今後どう伸ばしてゆくべ
きなのかという課題に世間の関心が寄せられ
ているところです。文部科学省は、話す力も
含めた総合的な英語力を伸ばすための実践
として、「授業において複数の領域を統合した
言語活動を充実させることが求められる」た
め、「これらの活動を通して、聞いたり読んだり
したことに対して自分の考えをもつことができ
るように指導することが大切である」と述べて
います^{※9}。この潮流が今後の主流となって
ゆくだらうということを示唆する事例を紹介し

て、この小論を締めくりたいと思います。

私が今勤務する大学で「英語科教育法1」
という授業を受講している学生が答えてくれた
アンケートの回答を一部抜粋してみます。将
来どんな英語教師になりたいかという問いか
けに「全員が楽しく元気に参加できる英語の
授業をしたい」「自分がどう思ったか、考え、
感じたのかを表現できる英語力をつけさせたい」
「異文化交流といったコミュニケーション
を通じた価値観の共有の大切さを授業で伝
えてゆきたい」などと答えています。もちろん
全てを実現できる実力をつけてもらうのはま
だまだ先のことになると思いますが、志として
こんな思いを持った英語の先生が全国各地
の現場に輩出されていくでしょう。そんな理想
的な未来を夢想してしまいます（その実現のた
めに私も今の大学でできることを一生懸命や
ろうとしています）。こうした未来の世代の英
語教師がいる限り、英語教育はきっと良い方
向に変わってくるはずですよ。

※8 佐古 孝義レポート(2023)「大学入学共通テストの出題内容の変化とTOEFL Junior®の受験価値」

※9 国立教育政策研究所(2023).「令和5年度全国学力・学習状況調査 児童生徒一人一人の学力・学習状況
に応じた学習指導の改善・充実に向けて」(報告書 中学校 英語【速報版】)文部科学省、p. 93.

6. おわりに

色々ここまで述べてきましたが、皆さんに
は、単に入試を突破するためとか就職などに
有利なスキルとしてだけの英語学習ではなく、
「複言語能力」として、日本語も英語も(その
他の言語も)使って「自己」と「他者」と対話し
てゆけるために、生涯学習として英語を学ぶ
べきだし、そのための素地を教室の中で身に
つけていってほしいと考えています。先述のと

おり、その手助けをしてくれる先生もどんど
と増えてゆくことでしょう。どうか焦らず自分な
りのペースで、末長く英語と付き合っていて
ほしいと私は思っています。そんな**継続的学
習のお供に、TOEFL Junior®のような〈熟
達度〉を測る試験をうまく活用していってもら
えと、なお良いのではないのでしょうか。**